

みんなは優しいバをもっ

小幡 おはた 歩夢 あゆむ

私が、学校の帰り道お友達と帰っていたら、

少し飲み物が残っているパツトボトルを道路

の真ん中に捨てている人がいた。私は注意す

る事もそのゴミを拾う事もできなかった。そ

の時はなんとも思わなかったけど家に帰って

から、モヤモヤし始めた。あのゴミはどうな

ったんだろう。あのゴミでだけれがけはして

いないかな。そう思ってた。夜ねようとして

も、あのゴミがどうなったのか考えてしまっ

た。次の日の朝その道を通った。あのパツ

トボトルのゴミはパチャンコにされて虫が沢

山集まっていた。少し気持ち悪いなと思っ

てしまった自分がいた。その次の日の朝も、そ

のままだった。むしろ、もつと虫が集まっ

いたし、変なおいもした。その日の帰り道

またその道と通ったら、そこに人がいた。だ

れだろうと思ってみてみたら、おばあちゃん

だった。自分の家でいっしょにくらしている

ばあちゃんくらいのねんねいだろ。うと私は思
 った。見ているだけかと思ったら、そのおば
 あちゃんにはポケットから一枚のゴミぶくろを
 とりだして、そのポケットボトルのゴミをがい
 しゅうしはじめた。私はおどろいた。自分の
 ゴミでもない、だけれのゴミかもわからない虫
 のたぐさん集まってるゴミをひろってくれ
 た事に。その後、家でなぜ誰のものかもわか
 らないゴミをひろってくれたのか考えてみた。
 今の私だ。たら拾わないだろう。でも、その
 おばあちゃんは拾ってくれた。車が事故を起
 こさないためかな。それもあると思う。でも、
 一番はその道にたくさんの小学生が歩くから
 それで危ないと思っでくれたのだらうと私は
 思った。その時私は思い出した。そのゴミを
 拾ってくれたおばあちゃんは、朝にいつも家
 からわざわざ出てきてくれて私達に挨拶をし
 てくれる。冬のとて寒い日も家から出てき
 て、挨拶をしてくれた。その時、私はあのゴ
 ミを捨ててくれたおばあちゃん、いつも朝に

これから、

「ありがとうございます。」

「ごめんなさい。」

とかの言葉を常に出るようにしたい。あの時

のおばあちゃんのように素直に生きていき

いたなと思った。